

In memoriam AKIRA YAMADA (1922-2008)

中 川 純 男

山田晶先生は2008年2月29日朝、鎌倉で亡くなられた。八十五歳であった。先生は1980年から1986年までの6年間、中世哲学会の委員長を務められた。もちろん、それ以前から会員であり、そしてなによりも創立当初から会を支えてきたひとりであった。最初の「中世哲学会会報」には、昭和26年11月3日に東京大学哲学研究室で開催された第一回設立準備会に出席した「新進研究者」のひとりとして、「山田晶」の名が記されている。次の「会報Ⅱ」によれば、昭和27(1952)年度の会費納入者は賛助会員を除いて33名とあるから、規模は現在の中世哲学会とは比べるべくもない。いまの中世哲学会に目を向けるなら、会員数だけでなく、研究テーマの広がりや奥行きにも隔世の感がある。会を設立した方々の熱意が実を結んだとあってよいであろう。わが国において、特別な伝統をもたなかった西洋中世思想の研究が、多くの若い学徒を引きつけたのは、中世思想そのものの魅力によることはもちろんであるが、その魅力を身をもって現した先達に負うところも多い。学究に捧げられた生といってもよい山田先生の生き方は、研究を志すものにとって力強い導きであり、励ましであった。

山田先生の仕事のなかで、もっとも多くの読者をえたのはアウグスティヌス『告白』の翻訳であろう。この労作のおかげで、時代と地域の隔たりを一気に超え、アウグスティヌスを身近に感じた読者も多いのではないか。それに次ぐのは京都北白川教会での連続説教を綴った『アウグスティヌス講話』であろう。のちに大佛次郎賞を受賞したこの作品は、平明な文体と、説得力のある論理、そして何より人間を見る目の優しさが読むものを惹きつける。このような魅力は、より専門的と呼ぶこともできる、ほかの著作や論文にも共通する。

研究を表現するかたちは研究の方法を反映する。山田先生の研究スタイルは、ある意味でわれわれが慣れ親しんできたのとは異なっていた。さまざまな訳や解釈を参照し、それぞれを文脈において理解し評価したうえで、テキストそのものもつ可能性を見極めようとする分析方法は、さまざまな可能性のなかからただひとつの解釈を選び出すことに専心する多くの研究と趣を異にする。近代的なテキスト解釈は、テキストのただひとりの著者によって意図された、ただひとつの意味を前提し、そのただひとつの「意味」を発見しようとする。このような方法に慣れた目には、さまざまな解釈を参照しつつ、そのひとつひとつをテキスト解釈の可能性として位置づけ、ただひとつだけの結論に至らないことも多い山田先生の方法は、労苦の多い回り道のように思われることもあった。しかし、いま思うと、それはテキストとわれわれとの間にある時間と空間の隔たりを正しく評価する唯一の方法ではなかったか。山田先生の方法はたんにテキスト解釈を相対化しているのではない。解釈者のつくりだす多様な解釈が多様なままにすべて許容されるのではない。テキストはそれを記した著者と著者の生きた世界にその生命の源泉を有している。その生命をよみがえらせようとする解釈者も、それぞれの時代に生き、その生きる世界に原著者の生を再現しようとしている。このようにしてテキストも解釈もそれぞれが人間の生に根ざし、生の可能性を表現している。その背後には生を成り立たせている世界がある。それぞれの世界は互いに共通部分を有しつつも異なっている。ここに解釈の多様性の根拠がある。このように考えてくると、テキストや解釈といったことばの領域とことばが表す「もの」の世界とを結ぶため、トマスの用意した「ラチオ」という考え方が思い浮かぶ。「ラチオ」はことばによって表現される。しかし「ラチオ」は、たんにことばの領域にとどまっているのではなく、「もの」の領域に深く根ざしている。予告された山田先生の中世哲学研究五部作のうち、最後の『トマス・アクィナスの《ラチオ》研究』はついに出版されることがなかった。もちろん山田先生の業績には、やがてこの著作の一部を構成するであろう論文が含まれている。しかし、「ラチオ」という考え方は、あらためて反省されるまでもなく、山田先生の研究に浸透していると言えるのではないか。五部作が『トマス・アクィナスの《レス》研究』で終わったのは、ラチオ研究から始ま

った山田先生のトマス研究がラチオの極限にレスを見いだしたからだということもできる。山田先生の研究は、研究そのものが中世哲学研究からえられた考え方に導かれて展開している。この意味で山田先生は中世哲学が現代の哲学でありうることを身をもって示されたといえよう。

山田先生のトマスは、ある意味でトマス以上におもしろい、と評した研究者がいた。トマスのおもしろさを存分に味わった研究者である。山田先生の研究を評することばとしてこれほど適切なことばはないように思う。先生の安らかな眠りを祈る。